Point of view『パーフェクトブルー』

アイドルとリアリティー

三谷伸太朗

１９９８年日本公開なので、脚本が書かれたのは１９９５～７年辺りだろうか。世相的には２０００年に向かって経済的な暗いムードが漂う中、アイドル的にはＳＰＥＥＤが登場したもののＤＡＰＵＭＰやモーニング娘、鈴木亜美が登場する直前の時代である。

記憶を辿るとこの頃は大手各社がなんとかヒットするアイドルグループを作ろうと模索していたものの、なかなか上手くいっていない冬の時代だったように思う。

アニメ的にいうとセイバーマリオネットＪや機動戦艦ナデシコなどの美少女ラブコメが台頭してきており、後にＷＯＷＯＷで美少女アニメが流行し現在のようなアイドル声優ブームに近いものがヲタク界隈で起こって盛り上がる直前であった。

そういった鬱屈とした雰囲気とインターネットが一般に広がり始め、時代が変わっていくという期待感を一部の人々だけが抱いている得体の知れなさ、そして男性主導の文化であるアイドルやアニメなどが新たな形に再構築され、そこで少女達が性的に消費されていくという予兆の物語として、さらには普遍的な女性の人権の話として本作はとても秀逸である。

言わずもがなエンタメやサスペンスとしても素晴らしいのではあるが、そう「一般的なもの」として観る視聴者の視点すらもメッセージとテーマを強めるために作用しており、その脚本的すごさにただただ唸ってしまう。

三十年近くたった現在もアイドルを取り巻く環境は本質的には変わっていない。「推し」ブームの現在、パーフェクトブルーは取り上げられるべき作品である。

本誌でシナリオを読み初めて知った方々はもちろん、以前に観て時間が経っているという方々にも改めて配信やリバイバル上映などで本作を観ていただきたい。そして是非感じていただきたい。途中でアニメを観ているということを意識しなくなってしまうほどの圧倒的リアリティー。そしてそれがアニメ的な高揚感にも溢れ、オシャレでスタイリッシュに見えるのは間違いなく昨今の流行の影響や時代などではなく普遍的なテーマ性と脚本の強度だということを。

最後になりましたが一ファンとして、本作の掲載許可をいただけたことをとても感謝いたしております。関係各位の皆様と脚本の村井さだゆき様、誠にありがとうございました。